

#### 490 ポジトロンCTによる皮質性痴呆の局所脳障害の検討：特に Frontal non-Alzheimer dementia について

一宮 厚<sup>1</sup>，山田尚吾<sup>1</sup>，末次基洋<sup>1</sup>，一矢有一<sup>2</sup>，桑原康雄<sup>2</sup>，大塚 誠<sup>2</sup>，三宅義徳<sup>2</sup>，増田康治<sup>2</sup>，（九州大学精神神経科<sup>1</sup>，同放射線科<sup>2</sup>）

われわれは、初老期以降の器質性精神障害を有する患者について、ポジトロンCTにより局所脳糖代謝率（rCMRglc）を測定して、局所脳障害の検討を行なっている。

対象は、徐々に進行した痴呆や人格変化を呈した女性10例、男性2例の皮質性痴呆12症例である。

このうち、人格変化と痴呆を主症状として、X線CTで前頭・側頭葉に限局性の萎縮を認め、臨床的にPick病が疑われる2例では前頭・側頭葉のrCMRglcの低下が著明であった。また、比較的軽度の人格変化のみを示した1例や妄想のみを呈した1例でも前頭葉の低下がみられた。

以上の4例はFrontal non-Alzheimer dementiaと考えられる。ポジトロンCTによれば、その脳障害の部位は主として大脳皮質前半部であり、臨床的にAlzheimer病と診断された他の8例にみられた大脳後半部を主とする脳障害とは異なっていた。

#### 491 皮質下痴呆におけるポジトロンCT

大塚 誠<sup>1</sup>、一矢有一<sup>1</sup>、桑原康雄<sup>1</sup>、三宅義徳<sup>1</sup>、増田康治<sup>1</sup>、細川晋一<sup>2</sup>、加藤元博<sup>2</sup>、一宮 厚<sup>3</sup>、末次基洋<sup>3</sup>（九州大学放射線科<sup>1</sup> 同神経生理<sup>2</sup> 同精神科<sup>3</sup>）

ポジトロンCTを用いて皮質下痴呆患者の局所脳血流量、酸素消費量、糖代謝率を検討した。

対象は進行性核上性麻痺5例、パーキンソン病1例、舞蹈病1例の計7例である。

脳血流量および酸素消費量は<sup>150</sup>-steady state法（H<sub>2</sub><sup>150</sup>持続静注法、<sup>150</sup>O<sub>2</sub>持続吸入法）を用いた。糖代謝率は<sup>18</sup>FDGを3-7 mCi静注して測定した。

進行性核上性麻痺では大脳全体の血流量、酸素消費量および糖代謝率の低下がみられたが、とくに前頭葉で著明（20-40%）であった。また前頭葉での低下の程度には左右差が認められるものが多かった。